

松波むかし語り ここに生き続けて その2

今回のお客様

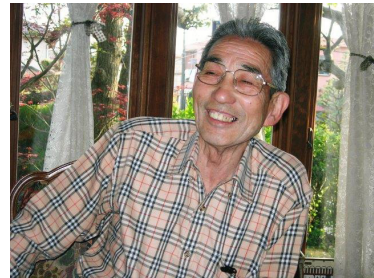
クリーニング店「パール商会」を経営する

作田 稔 さん 75歳 3丁目

昭和32年、現在のはす向かいに店開きしました。

乾燥機のない頃は、雨が降ると夏でもストーブをたいて、その下を這って歩いたもんです。

「店が借りられるというので、松波まで見に来ました。たまたま天気のいい日だったので、いいところだと思って決めました。ところが、雨が降ったら床上まで水が上がってね。池でどじょうやフナが獲れたし、夜になると食用ガエルがにぎやかでした」。まだ、郵便局の前のバス通りも舗装していなかった昭和30年代初めの話ですが、今からは想像できませんね。



なぜクリーニング店ですか？ 「九十九里の白子町に疎開している時、母親のいとこがクリーニング店を経営してたんですが、入院してしまって『手伝ってくれないか』と言われて始めたんです。サラリーマンになりたかったんですがね……。当時、洗濯ものを抱えてお店に来てくれる客は1割くらいで、ほとんどは自転車でご用聞きして集めて回ったとか。ご用聞きというと、「サザエさん」に出てくる三河屋のさぶちゃんを思い出しますが、そんなにのんびりした世界ではなかったそうです。「なにせ背広一枚でもよけいとろうと思うから、お屋敷のお手伝いさんに気に入られようと必死でした」。



昭和30年代 改装開店の日

その頃はまだワイシャツを着て仕事に出かけるサラリーマンも少なかったそうです。「大学の先生だってワイシャツなんか着る人は少なかったですね。むしろ、3月に衣替えで出る奥さんの冬物のほうが仕事になりました」。「乾燥機がなかった当時は、洗濯ものが乾くまで1時、2時まで起きていました。雨が降れば夏でも冬でもストーブをたいてね。家の中を這（は）って歩いたもんですよ」。いまはボタン一つで機械が仕上げしてくれる時代になりました。その分、設備にお金がかかり敷地も広さが求められます。

最後に、千葉市のクリーニング店では初めてのカタカナ名だったそうですが、「パールクリーニング」の由来を聞いてみました。「おじの家のはす向かいに住む娘さんが英語をしゃべってましてね。『クリーニングって真珠みたいにきれいにする仕事でしょ』と言われてたんです。よし、将来独立したら店の名は「パール」にしようと、その頃から決めていたそうです。いまは市内に支店も誕生しました。「自分一人でここまで来たわけじゃない。いろんな人のアドバイスがあったからです。“地域の人たちを大切にしないと”と息子に言うんですよ」。